



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

第37回 運動会 —感動の価値観は変わらない—

校長 白石 亨

5月、澄んだ碧い五月晴れの空の下、清新二中の朝は早い。

早朝から生徒の歓声が校庭に沸き立ち校舎に反響した。運動会に向けての朝練習が行われているからだ。朝7時30分を過ぎると多くの生徒が校庭に集まり、クラスごとに学級対抗リレー、学年種目、大縄跳びなどの練習が始められていく。中でも大縄跳びの競技はクラスの纏まり、団結心がとても強く求められる。これがとても難しい。約20人に近い生徒が気持ちをひとつにして縄を跳ばなくてはならないからだ。気持ちを合わせるために、跳んだ回数を大きな声で数えていく。そして隣のクラスがたくさん跳ぶと、メラメラと闘争心、ライバル心に火が付き、自分たちも負けじとばかりに熱が入る。生徒と先生方の熱気で、清新二中のグラウンドだけは朝からグングンと気温が上昇した。

そして迎えた運動会本番。

「走る姿は人の心をうつす」…との言葉があるが、まさにそのことを実感した。スポーツや運動には様々な競技・種目があるが、テクニカルの面をすべて削ぎ落とし、最も根源的かつ基本的な運動がある。それが走ることだ。だからこそ走る姿は最も自分らしい自分をさらけ出す。もちろん、走ることにっては得意・不得意がある。運動そのものが苦手な場合もある。だが、清新二中学生のすばらしいところは、クールな顔をしながら、悪ぶりながらも一所懸命に取り組むことができることだ。速い遅いにかかわらず、真直ぐな気持ちが真直ぐな走りに出ていた。このことがとても嬉しく感じられた。

そして本校運動会の花形は全校生徒によるソーラン節だ。

全校生徒が揃いの黒い長半纏に身を包み、太鼓の大きな音に合わせて駆け出していく。素足に校庭の砂がめり込むのも、何のそのだ。「構え！」の3年生の掛け声で、足を大きく開き、姿勢を低くして、手の指先までも神経を張り巡らせて前に真直ぐに伸ばして身構える。このポーズがとても苦しい。だが誰一人として微動だにしない。そして一気に踊り出す。長半纏が颯爽と気持ちよく風に大きくなびく。キビキビと長半纏が宙を舞う。一人ひとりがしっかりと舞いながら仲間と息を合わせ踊っていく。

実は、一回目の全体練習を見たときはかなり心配だった。確かに生徒個々には踊れているものの、全体としてはまとまりがなかったからだ。だがここで力を発揮してくれたのが3年生だ。実行委員を中心にして大きな声を出して下級生を牽引してくれた。1・2年生は3年生の息の合った踊りを見て、強い刺激を受ける。そして全体練習を繰り返していく中で何かが変わっていく。同じ空間で、同じ時間をともに過ごし、同じ思いをもち続けることで、気持ちがひとつに変わっていく。初夏の暑い日射しが照り付ける中、ひたすら練習に取り組んできた成果が、本番でのソーラン節の集団の美として昇華した。

人々に感動を与える価値観はいつの時代も変わらない。

個性尊重、個人重視の時代といわれているが、集団でひとつの物事を創り出す大切さ、素晴らしさ、達成感等のよさはいつの時代も変わらない。不易である。だからこそ運動会における生徒の頑張りは来賓、地域の方々、保護者の方々に大きな感動と感銘を与え、大きな声援と拍手をいただけたのだと思う。

運動会。集団だからこそ、生徒自らが課題を乗り越える特別な力が秘められているのだと思っている。